

令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【つばさ小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	
思考・判断・表現	

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> 前学年以前の内容を問う問題の正答率が低い。 <指導上の課題> 児童が既習事項を振り返ったり、反復や習熟に取り組む時間の設定が不十分である。	⇒ 「ドリルパーク」等を活用し、現学年以前の内容も含め、漢字や基本的な計算等の反復・習熟に取り組む。業前のモジュール学習を活用する。【月に2回以上】 ⇒ 系統性を意識した指導及び学習のために、「ドリルパーク」等を活用し、既習事項の定着状況やレディネスを確認する機会を設定する。【学期に2回以上】
思考・判断・表現	<学習上の課題> 国語の「B書くこと」の問題やその他の教科の文章表現の問題で正答率が低い。自己の考えや表現についてメタ認知し、自己調整する力が弱い。 <指導上の課題> 児童が自己の考え・表現について、評価基準や他者の考え・表現を参照しながら振り返り、見直し機会が不十分である。	⇒ 問題解決型の学習過程や、ルーブリック等を活用した評価基準の共有化・明確化と振り返りを取り入れた授業を行う。【学期に2回(単元)以上】 ⇒ さいたま市学習状況調査「学級の友達とて話し合う活動を通して自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」の質問項目において、肯定的な回答の割合を前年度より向上させるために、話し合いの他、1人1台端末を活用した共同編集や他者参照の機会を設定し、協働的な学びを通して考えたり、表現したりすることができるようにする【週に1回以上】。

⑤	評価(※)	学力向上策の実施状況
知識・技能		①結果分析(管理職・学年主任等) ②詳細分析(学年・教科担当) ③分析共有(児童生徒の実態把握) 職員会議・校内研修等
思考・判断・表現		

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	国語では、漢字の問題の正答率が向上した一方で、情報の扱い方に関する事項の内容で記録やメモの書き表し方について正しい説明を選ぶ問題の正答率が低かった。算数では、異分母の分数の加法の問題の正答率が高い一方で、数直線上に示された数を分数で答える問題の正答率が低いことから、正しく計算する技能は定着しているものの、分数のものに関する基本的な理解は十分に図られていないといえる。理科では、金属の性質や電気の回路など、中学年の学習内容に関する問題の正答率が低かった。今後は、より一層、「ドリルパーク」等を活用しながら、反復・習熟のための学習機会や学習の系統性を意識して基本的な既習事項の定着度合いを確認・指導する機会を確保していく必要がある。
思考・判断・表現	国語と算数、理科の全ての教科で、記述式の問題で正答率が低い傾向が見られる。昨年度の国語と算数の全国学力・学習状況調査においても同様の傾向が見られたことから、学校全体の課題といえる。解答類型を見ると、正答の条件2つのうち1つしか書けていないために不正解となる児童が多かった。今後は、国語では、話すことや書くことにおいて、目的や意図に応じて内容や表現の工夫を考える学習を、また、算数では、考えを言葉や数を用いて記述する学習をより充実させていく必要がある。各教科においても、問題解決型の学習過程を取り入れ、児童が問題を見いだしたり、解決に必要な活動を考えていけるようにする必要がある。

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	
思考・判断・表現	

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	1学期の取組み状況についての教職員アンケートでは、「現学年以前の内容も含めた漢字や基本的な計算等の反復・習熟の月に2回以上の実施」について実施できたという回答が62%、「既習事項の定着状況やレディネスの確認の学期に2回以上の実施」について実施できたという回答が55%であった。これらの項目も頻度が満たない場合も含めた「実施した」の回答は9割程度であった。	変更なし
思考・判断・表現	C	1学期の取組み状況についての教職員アンケートでは、「問題解決型の学習過程や、ルーブリック等を活用した評価基準の共有化・明確化と振り返りを取り入れた授業の学期に2回(単元)以上の実施」について実施できたという回答が60%であった。一方、「1人1台端末を活用した共同編集や他者参照の機会を設定した授業の週に1回以上の実施」について実施できたという回答は40%であったので、今後、策を見直し、さらに取組みを共有し、広めていくようにする。	「1人1台端末を活用した共同編集や他者参照の機会を設定した授業の週に1回以上の実施」については、協働的で深い学びの実現という目的や児童の発達段階を考慮すると、「1人1台端末の活用」に限定することなく従来からの話し合い活動も含めた方法で実施し、評価していく。【実施時期・頻度については変更なし】

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)